

第12回 真実なる神の約束のもとに錨を降ろせ

第6章13節から20節 神の確かな約束

- 13;神は、アブラハムに約束する際に、御自身より偉大な者にかけて誓えなかったのに、御自身にかけて誓い、
- 14;「わたしは必ずあなたを祝福し、あなたの子孫を大いに増やす」と言われました。
- 15;こうして、アブラハムは根気よく待って、約束のものを得たのです。
- 16;そもそも人間は、自分より偉大な者にかけて誓うのであって、その誓いはあらゆる反対論にけりをつける保証となります。
- 17;神は約束されたものを受け継ぐ人々に、御自分の計画が変わらないものであることを、いっそうはっきり示したいと考え、それを誓いによって保証なされたのです。
- 18;それは、目指す希望を持ち続けようとして、世を逃れて来たわたしたちが、二つの不変の事柄によって力強く励まされるためです。この事柄に関して、神が偽ることはありません。
- 19;私たちが持っているこの希望は、魂にとって頼りになる、安定した錨のようなものであり、また、至聖所の垂れ幕の内側に入って行くものなのです。
- 20;イエスは、私たちのために先駆者としてそこへ入って行き、永遠にメルキゼデクと同じような大祭司となられたのです。

さて、この「ヘブライ人への手紙」の執筆背景は、背教の危機に晒されていたキリスト者たち、或いは、信仰を捨ててしまうという棄教に追い込まれていたキリスト者たちに対して、「キリストにしっかり結びついていなさい、キリストはそこでも憐れみ、あなたがたを救ってくださるのです。」ということをしつかり宣べ伝えようとして、書かれたのだと言えます。

そこで今回の箇所は、前回12節に「あなたがたが怠け者とならず、信仰と忍耐とによって、約束されたものを受け継ぐ人たちを見倣う者となってほしいのです。」とあった勧めの展開であり、「その信仰によって、また忍耐によって約束されたものを受け継ぐことを待ち望んでいた人々」に向かって宣べ伝えていこうとする具体的な事柄なのです。ですから、一人一人の切迫している現実の厳しさを踏まえ、彼らの心の状態を非常に憂いつつも、だが、そうした中で尚も神の恵みは先行しているのだ、神は彼らの立場を貫いて救いに導かれるのだ、ということをしつかり認識させたいという願いをもって、書かれている箇所なのです。

第13節から15節、

神は、アブラハムに約束する際に、御自身より偉大な者にかけて誓えなかったのに、御自身にかけて誓い、「わたしは必ずあなたを祝福し、あなたの子孫を大いに増やす」と言われました。こうして、アブラハムは根気よく待って、約束のものを得たのです。」

ここからは「神の約束の確かさについて」が語り始められます。

それには先ず、ユダヤ人たちにとって最も優れた先達、信仰の父とも尊ばれているアブラハムの信仰人生を例示しながら、「アブラハムと神との関わり方をここでもう一度確認した上で、そこから、あなたがたの考えを進めていってもらいたい」と、著者は「神は、アブラハムに約束する際に」という言葉で語り始めるのです。

カルデヤのウルにいたアブラムに「あなたは、故郷を離れ、親族を捨てて、わたしの示す地に出てゆきなさい」と呼びかけられた神は、更に「あなたはわたしの前を歩むことによって全世界の祝福の基になりなさい。そのためにわたしはあなたを祝福し、あなたの子孫を海辺の砂のように、大空の星の数のように多くするから」という約束をされたのです。

つまり「彼らを祝福する、即ち、大いなる国民にしてくださる」ために「子孫を多く与えてくださる」という約束でした。

ところが現実には、アブラハムには子どもがいなかった。神からの召しに従ったけれども、やはり子どもが与えられないまま、という絶望的な現状を目の前にして、「神様、あなたの約束は本当に有効なのですか」と問わずにはいられない不信仰を押し殺し、彼は尚も神の約束が叶う日を待ち続けた。それから25年目に、正妻サラにイサクアブラハムはこのイサクを神からの特別な授かりもの（奇跡の子）として大いに喜び、感謝して育てた。

ところが、イサクが多くを薪を背負える年頃になった時、神はアブラハムに、「モリヤの山に登り、あなたの愛する独り子イサクを、焼き尽くす献げ物としてささげなさい」と命じられた。これはアブラハムにとって極めてショッキングな出来事であった。どうしたらいいのだろうか、神が約束の証しとして与えてくださった息子を、このような形で取り上げられてしまうならば、一体どうやってこれから先、神を信じていったらよいだろうという状況に、彼は突き落とされたわけです。ですが、その中で尚、彼は神の御言に従い続け、イサクを神に献げるために指定されたモリヤの山に向かって出かけて行った。

その山で、神は、アブラハムの信仰を義しとされ、イサクを彼にお返しくださった。それからまた待つこと60年にして、やっと孫が、しかも双子の孫を授かることになるわけです。星の数ほどにあなたの子孫を増やすよと仰った神は、結果的には、サラに、ハガル、ケトラを含めた三人の妻の子8人と、彼らの子どもたち、また、その子孫たちを与えてくださった。その子孫のひとりが、主イエスの養父ヨセフなのです。15節に「こうして、アブラハムは根気よく待って、約束のものを得たのです。」とあることが、成就したのです。

14節の神の約束は、アブラハムの目から見たらば到底適いそうもない御業でしたが、その約束が確かなものであることを証しするために、13節で主は「御自身より偉大な者にかけて誓えなかったのが、御自身にかけて誓い」と書かれています。

これは創世記22：16—17のところで語られている言葉の引証です。「わたしは自らにかけて誓う」という言い方で、アブラハムに向かって語りかけておられます。

だからユダヤ人たちは「私たちの主は生きておられます」という言葉を右手を挙げて唱え、それから誓いをするのです。それが「神にかけて誓うということ」なのです。「自分たちは不確かで頼りにならないけれども、変わらない御方、真実な御方、唯一の絶対者である神が、この約束を聴いてくださり、その保証人になってくださるのですから、私のこれから誓うことは、（神において、主に責任を委ねる上で）確かなことなのです」と表明するための「誓い」を成すわけです。

教会関係ですと、「誓う」ことは、一般的には「結婚式での誓約」「夫婦間の誓約」に用いられます。司式者は、本来その二人がうまくゆくかどうかはつきり分からないのです。人間など本来不完全な者で、不実な者ですから。「しかし、神はこれを成してくださり、整えてくださる御方であるがゆえに、神の憐れみによってこの家庭が祝されてゆくよう御名によって祈り願いましょう」と参列者に呼びかける。これが誓約によって表されることです。

他にどんな誓約が教会にあるかということ、長老になると役員の方の誓約がある。教会学校の先生になると教師としての誓約がある。あるいは牧師を志す者は日本基督教団の場合ですと最初に准允を受けて誓約をする。その次には按手を受けて誓約をするという、神の御前で「私は皆さんに誓います」と述べるのですが、「私自身は不確かな存在ですから、神よ、あなたがどうか私自身を支えて、この誓いを果たせるように導いてください」という祈りと願いがそこに込められ、誓約が行われるのです。

「わたしは必ずあなたを祝福し、あなたの子孫を大いに増やす」と言われたのは、神が絶対的な事柄としてアブラハムに告げられたことです。

「目に見えない、現実的でない、全くそうならない状況が＜未だ＞そこにあったとしても、神はもう＜既に＞沢山の子孫をあなたに与えてくださる御計画なのです」ということになるわけです。けれども、それが目に見えない、受けとめられない、感じられない、という現実、正に神の御言を無為にしようとするあらゆる負の力の影響から起こって来ているのです。

私たちは確かにイエス・キリストの十字架の贖いによって、神からの平安を＜既に＞頂いているはずなのですが、現実には私たちには＜未だ＞それは見えて来ないゆえに、私たちの周りでは、神の平安があまり感じられていないこととなります。

この間、ある方と「ペルーの人質事件」についての話をしていた時に、彼が言うには、「とうとうこの問題は、解決しないままに年を越してしまいましたね」と、まあ、そう仰るのです。「司祭さんがお出でになって話をしているようですけれども、なかなかうまく話が見つからないようです。司祭さんが中に入ったんだから、神様は心を開いて、皆平和にしまえば良いのに」と、こうも仰るのです。

私はその時に「いや、司祭さんが入った時には、そこに既に平和があったのです」と申し上げたら、変な顔するのです。司祭が日曜日に公邸を訪れたのに、何の進展もなかったと日本の報道機関の全部が報道したのです。ところが実は、日曜日に司祭はミサのために公邸に行ったのです。キリストの御前にミサを献げたのです。そこでは人質も人質を取った人々もなく、神の御前に、赦された罪人として皆、膝をかがめて神に礼拝をしたのです。そしてそこには「確かに平和があった」のです。

しかし、一般の報道機関や日本人の人々の目には「神の平和」が見えないのです。その平和は、そのところに本当の意味で、彼らが疲れ果てないでいられる理由があるのだ、ということ、神を信じない者には見ることはできないのです。

ゲリラたちは人質の扱い方が大変良かったので、そんなに心身的な疲労はないようだなどという言い方をしていますが、「一週七日間の中の一日だけ、敵も味方もない、抑圧者も非抑圧者もない<ひと時>がそこに訪れている、<皆、赦された罪人として神の前にへりくだる時>が許されているということが、強度の緊張関係をどんなに大きな平安に導くことか」ということが「伝わって来ない現実」が、やはり私たちの中にもあるのだな、との時しみじみと感じたのです。

やはり「見せかけの（形の上での）平和」、言い換えれば「人質が全員解放されて、彼らはもうこれからは暴れません。平和になりました」ということが、大多数の人たちには重大な関心事なのではと思いますが、彼らが今、感じている国家間の不安定状態とか、経済的行き詰まりの問題とか、そんなことは、幾ら表面的に皆が仲良くしている様相をしていても、少しも解決されていないのです。

(1997年を振り返りますと、政治、経済に大きな変化がありました。松山幸生先生はそれを年初に予感されていたように感じられます。)

創世記の記者は「彼は根気よく待ったけれども、最後まで、その子孫が砂粒の数ほどになるまでは、約束成就を見ることはできなかった」と書いています。けれども、この手紙の著者は15節に「根気よく待つて、約束のものを得たのです。」と書いています。

ということは、ここで著者は、アブラハムの何を見ているかということ、<信仰>を見ているのです。祝福の約束が、彼の生存中には具現化されなくても、彼は、それは神が必ず与えてくださるものだと、信じる事が出来ていたのです。

この「根気よく待つて」という言葉も興味ある言葉ですが、他のところでは同じ単語を、例えばコリントの信徒への手紙Ⅰの13章「愛の章」では、この言葉が「忍耐強い」とい

う言い方で訳されています。ヤコブの手紙の中でも「忍耐し続ける」というように訳されています。

だから「根気よく待つ（マクロスーメナイ）」という言葉は、私たちが気長に何かを待ち続ける、あるいは呆然と待つのではなく「それが得られない状況にあるにも拘わらず、その状況を乗り越えて働いてくださる神の介入の力を信じ続ける」ということになるわけです。これは単語の頭にマクロがついているように、実際非常に重要なことなのです。ですから、私たちは割り合いに早く諦めて、割り合い早く自分の立場を変身させてしまうことが多いのですが、「いや、諦めるな」ということです。

確かに聖書の信仰は諦めない信仰なのです。私たちが神に対して嫌だと言っても、背信の罪を冒してさえも、「あなたはわたしの愛する子」と神は言い続けられる。抵抗し、反抗し、逆らっても、「わたしはお前を愛しているよ」と。

そこまで神は私たちを、イエス・キリストの十字架のゆえに、既に清められたものとして置いていてくださっている。そのことがここでもう一度、私たちの中に訴えかけられる言葉として書かれていることを前にして、私たちは、神に跪かずにはいられないのです。

「このように神が真実をもって、私たちに一生懸命で約束の確かさを示してくだらうとされているのですよ」と書いた後で、著者は次のことに進んで行っているのです。

第16節、17節

そもそも人間は、自分より偉大なものにかけて誓うのであって、その誓いはあらゆる反対論にけりをつける保障となります。神は約束されたものを受け継ぐ人々にご自分の計画が変わらないものであることを、いっそうはっきり示したいと考え、それを誓いによって保証なされたのです。

ここでは「誓いによって与えられる保証」とはどのようなものかを、今度は少し角度を変えた形で説明をしています。

先程言いました「神が誓う」という矛盾のようなことを思い起こしながら、神が誓われたことは「保証してくださるのだ、必ず成就してくださるのだ」ということを、私たちに対して語りかけてくださっているのです。

16節には「そもそも人間は」という一般論的な切り出しで、次の17節冒頭では「神は約束されたものを受け継ぐ人々に」という言葉で、当初アブラハムに限定して語ってきたことを、一般論にまで広げているのです。

「アブラハムの信仰を受け継いでいる人々、即ちキリスト者であるあなたがた、ということ具体的に語るのです。あなたがた一人一人に対する神のご計画は少しも変わっていないことをお示しになろうとして、誓われたのです」と、ここでは説明しているのです。

第18節の前半、

それは、目指す希望を持ち続けようとして世を逃れて来た私たちが、二つの不変な事柄によって力強く励まされるためです。

この自分たちが目指している希望、即ち、神との生きた関係を真剣に歩んで行こうと決心した時、この世から切り離され、この世の人々と足並みを揃えて生きることができなくなる、これを、例えばパウロ的な表現で言えば「聖とされる」ということです。この世の者と霊的に一緒にいられなくなり、別者として選り分けられる、それが「聖とされる」という言葉で表現されている。

「聖とされる」それは、もはやこの世と一つではないということなのです。そういうこの世と一緒にたにならないで、この世から離れていったあなたがた、極端な言い方をすれば、この世を捨てて来たあなたがた、この世から締め出されて来たあなたがた、でもいいと思うのです。そういうあなたがたに対して、神は「二つの変わらない事柄」これは一体何を指しているのかと言うと、大変興味のある問題で、色々な方が、この「二つの変わらない事柄」を取り上げて述べています。

私は、この「二つの変わらざる事柄」というのは、キリストにおいて私共に与えられた①究極的な贖罪の御業と、②永遠の命への招きであって、「十字架と復活という二つの約束、二つの出来事」によって、私たちが絶えず励まされ続けているのだと考えます。ですが、この場合「十字架」を持ち出すと、そこには絶望しか感じ取ることのできない現実が、当時の彼らの眼前には生起していたのです。「受難が、迫害が、」と。しかし、著者は告げます。「二つの普遍的な事柄の中に秘められている、究極的な贖罪と永遠の命への招きとを、あなたがたはしっかりと受けとめなさい」と。そして「目の前の現実を突き破る力、それを全く問題にさせない力、どんなにこの世がもがいても、抵抗させない力をもって甦られたイエスの命、その命にあなたがたが与るように召されていることを、しっかり示してくださろうと、神はアブラハムの『明日』への約束を、あなたがたに雛形として示してくださったのだ。」と。

「この『明日』ということは、ある意味では『永遠』なのです。そして『今日』というのは、罪から贖われるという現実ですから、正に『十字架』なのです」

旧約聖書をきちんと学んでいないと、イエスの十字架の贖いというのは、これほど念を入れてくどく言われなければ、伝わって来ないことが多いのです。しかしながら、新約聖書が私たちに提示する「義」というものは、100%を要求するのです。つまり「義であるか、義でないか」なのです。「多少は義」なんていうのはないのです。「あの人よりも義」というのもない。「全き義」でなければ、すべては「罪」なのです。

ですから、「私たちは全き義の者ではないのだから、全き罪人であるとしか言えない、そういう存在なのだ」ということを本当に知った時に、正に私たちは「闇⇒地獄」を見るわ

けです。そうすると、もう救われないという闇の中に突き落とされるような思いになる。

「もう私たちはおしまいなのだ」という、その「おしまい」を、イエスがすべて引き受けてくださった。だから「あなたには<おしまい>がなくなった、むしろ<始まり>があなたに訪れたのだ」ということが「あの十字架の出来事の中に秘められている、私たちへの神からの深いメッセージである」というわけです。

著者は、この後の僅かな箇所を割いて「大祭司キリスト論」に入るのだが、その前の序論として、このことをどうしても語っておかなければならなかった。「キリストなしには、あなたがたに<始まり>はないのだ」ということを、言わざるを得なかったのである。

こうして、この手紙の6章の13節から終わりの部分、即ち7章からの「祭司論に入る前の序論的な部分」では、イエス・キリストという御方と私たちとはどういう結びつきをし、どういう出会いをすることが大切なのかを「大変適切なアブラハムという存在をもって例示してくれている」と言えるのです。

第18節の後半、

この事柄に関して、神は偽ることはありません。

神が何かをなされる時には、すべて御旨のままに自由に行動されるわけですから、制約、制限はないのです。

ところが、ここでは、「偽ることはありません」という制限の言葉、ある意味二重否定の言葉を使っています。神は御自由ですから何事でも否定されることはないのですが、この約束に関しては「神が命をかけられたのだから、絶対に相違することはない」という完全な保証を「ありません」という形で著者は表明せざるを得なかったのです。²⁵

「神はあらゆることがお出来になるけれども、あなたに対して与えたこの約束『私たちに祝福してくださる』という約束は、神がどう心をお変えになったとしても変わることはありません」と読んでもいいと思うのです。言い換えると、それは私たちが地上の生活の中では全く感じることのできない、捉えることのできない、絶対的な神の祝福のお約束なのだ、どんなところからでもあなたを祝福するのだ、というある意味では大変積極的な、大胆な神の御思いがここで語られていると思います。

第19節、

私たちがもっているこの希望は、魂にとって頼りになる、安定した錨のようなものであり、また至聖所の垂れ幕の内側に入っていくものなのです。

すごくわかりやすい例を引用しながら著者はここで一つの結論を言おうとしています。

「神が、何があろうと私たちに救ってくださるという御約束の確かさは、この世に私どもの力で思い通りに実現させようというのではなく、神が用意してくださっているものを受け取ることにすべてをかけ、私たちがそれを信じて歩いて行くなれば、その約束は既に

成就しているのです、完成しているのです。しかし、それは神に私たちが近づかない限りあなたのものにはなりません。」と。

「この現実の厳しさの中で、神を信じるがゆえに疎外され、にも拘わらず、ここに集まって来ている、逃れて来ているあなたがたこそ、神に近づこうとしているのだから、福音の受け手になるのです」とこの著者は励ましているのです。

更に「だからあなたがたの希望は、神に近づくことによって初めて果たされるものであるのだから、その希望を繋ぎ止めるために、錨を神の御許に降ろしなさい」というのです。

「船の錨を降ろす」との言葉は聖書中二箇所ぐらいしか出てまいりませんが、当時の中近東或いは小アジア地方では、色々な場面で使われてきたのです。

船が大風に遭い、大嵐に遭い、大波に遭ったら、錨を降ろしなさい、そのことによって船は押し流されないですみます、安定を保つことができます。あるいは、船が港に着いたならば、そこで安息を得るために、先ず錨を降ろしなさいと言うのです。つまり「錨を降ろす」ということは、そこに自分が留まり続けられる保障となります。ですから、自分がそのことをしっかりと受けとめ、自分のものとするためにそこに居続け、そこで平安が得られるために、あなたがたは神の御許に錨を降ろしなさい、と勧めるのです。

私たちは新しい時代に生きていますから、なるべくでしたら錨など降ろさないで、何かあったらそこをすぐ退去してぱっと動けた方が良くと考える方が多いのです。けれども、そうではなく「信仰とは、そんなに慌てふためいて動き回る必要はないことなので、しっかり神の御許に錨を降ろしていなさい」とはっきり言うのです。

次いでそれから「至聖所の垂れ幕の内側に入って行く」という言い方をしていますが、この「至聖所の」という言葉は原文にはないのです。「垂れ幕の内側」とだけ書いてあるのです。神と人間とを隔てているその聖なる隔てを乗り越えてゆく、即ち「聖なる者となる」という行程です。

「大祭司」として神の御前に立つ資格をもつ者が垂れ幕の中に入るのは、自分の救いのためではないのです。イスラエルの救いのために、犠牲を献げるゆえ、大祭司は年に一回至聖所に入るのです。

ですから、キリスト者として生きている者は「自分の救いのためではなく、この世界であなたが生かされている歴史の救いのために、執り成す者として神の御前に立ちなさい。それが、引いてはあなた自身の救いとなるのです。」私たちは救われて楽をしたいとか、色々種々雑多なことは考えたくないと思いますが、そういうことではなく、あなたがたが救われる意味は、あなたがたが執り成す者になるということです。あなたがたを迫害する人々、あなたがたに対して誹謗中傷を告げる人々、あなたがたを疎外する人々、つまり、あなたがたの負の歴史そのものなる彼らを、赦してくださるように神に執り成す、そのことによって、あなたがたには平安をもたらされるのです。

イエスをキリストとして受け入れることは、私がどうこうなることだけでなく、それよりも「そこに生きている私によって関わりが与えられている社会が、家庭が、地域が、歴史が、神の救いに関わることを意味しているのだ」と言ってよいと思います。

(ここは一貫して徹底した松山先生の生き方が述べられています。)

イエスはそのために先駆者になってくださいました。今までなかったところにあなたがたのために道をつけてくださった、だからその道を歩きなさい。神のところに行く道は、イエスについて行く道しかないのです。うまい方法や速効的な方法はないのです。イエスが歩まれた道を歩むことが、正に神の救いにあずかることになるのです。

これは、当時迫害に遭ったり、様々な形で抑圧を受けたりしている人々にとっては、「イエスがお苦しみになられた御受難は、私たちのためだったのだ。そして今、私がかような苦しみを受けているのも、私がイエスについていく道ゆえなのだ。」という「一つの新しい着想による希望を、彼らの負の言動の中に生み出したに相違ない」と思います。そういう意味で、私たちが持っている希望は、そう簡単には叶えられるものではなく、私たちの目から見たならば、本当に不可能に近い大きな恩恵なのだということを、もう一度しっかりと覚えておくことが肝心だと思います。

第20節、

「イエスは、わたしたちのために先駆者としてそこへ入って行き、永遠にメルキゼデクと同じような大祭司となられたのです」

神の御前に執り成す最も聖なる偉大な祭司、祭司の中の大祭司、王の中の大王、それがメルキゼデクだと伝えられています。ですから「イエスは永遠にそのメルキゼデクになってくださった。そして、その御方、主イエスの御支配の中で、愛の中で、招きの中で、今日を生き、明日を生きてみませんか」という呼びかけとなるのです。

では、イエスが大祭司になられた後は、どうなされたのか、ということについては7章から後に説明されていくわけで、その7章への橋渡しとして「永遠にメルキゼデクになられたイエス」ということに、ここでは軽く触れ、6章の部分は終わっていると思います。

(1997年1月11日)

「“敵”を愛するために」

マタイ福音書 5：43－48

森 容子

マタイ5章冒頭には、「心の貧しい人々は、幸いである。」で始まる、有名な山上の垂訓、イエス様の「八福の教え」とも言われる御言がございます。

心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。
柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。
義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。
憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。
心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。
平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。
義のために迫害される人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。

でも、私たちの人生を率直に見れば、貧しいより裕福な方が、悲しむより楽しく笑っている方が、飢え乾くよりお腹が満たされている方が、迫害されるより歓迎される方が、幸いだなあ、と思われませんか。それは、否定致しません。

ですが、満月のように欠けの無い状態は、いつ欠けが始まるか、とハラハラして、とても不安定ですし、そもそも人が満足感を追求し始めると、きりがありません。どこまでも欲求不満と競争心がからみついて回ります。そしてまた、世の中には、人から慰められる、憐れみを受けることに、上から目線を感じて、抵抗感を覚える方々も少なからずおられるようです。

篠田桃紅という先生が仰るように、「幸福になれるかどうかは、この程度でちょうどいい、と思えるかどうかにある。」とか「人との競争で生き抜くのではなく、人を愛するから生きる。」というのが、人生の極意かもしれません。

しかしながら、イエス様の「八福の教え」は、身の回りの小さな世界の中における幸せや満足感、慰めや憐れみの奨励ではありません。目指すは、とてつもなくビックなビジョンです。天の国が、その人のものになるかどうか、神様が創られたこの全地を受け継ぐ者となれるかどうか、神様を目の当たりで拝することができるかどうか、神の子と呼ばれる資格を得られるかどうか、そんなことが提示とされているのです。すごいお話とは思いませんか！

それは、不完全で欠点だらけの人間が逆立ちしても、自力で達成できることではありません。すべての欠けや不足は、自我をいつまでも張っていても埋まりません。完全なるお方、神様に自分を明け渡し、お委ねすることによってのみ、欠けを充填して頂け、満たして頂けるのです。それには、自分の心の貧しさや飢え渴きを神様の前に披瀝すること、そして、悲しみや迫害と言うマイナスの勢力に襲われても、反ってそれを幸いだとするほどに、神様との関係性を濃密に保つ必要があります。

今日のお話の冒頭にこんなことを申し上げたのは、本日のテーマ「“敵”を愛するために」ということに関し、このことが単に、この世の倫理・道徳的な生き方のお勧めではなく、天国に通ず

る大いなる生き方を導く秘策であることを、お伝えするためなのです。

43-44 「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。

「隣人を愛し、敵を憎め」という教えの中の、「隣人を愛し」というのは、旧約レビ記19：18「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。」の引用です。ですが、後半の「敵を憎め」というのは、聖書にはそのままの言葉遣いでは見当りません。が、むしろ、旧約聖書全体から引き出された結論ということが言えると思います。彼らは、同胞のイスラエル人（ユダヤ人とも言いますが）に対しては、自分自身のように他者を愛さなければならないと自覚していましたが、異邦人である「敵」には恨みを抱き、憎み、時には皆殺しにしてよいとさえ、考えていました。

よって、ここでイエス様が言われた「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」という御言は、「あなたの隣人を愛しなさい」という大切な教えの中に、同胞と異邦人との民族的差別をつけてはならないということで、それはユダヤ人にとっては本当に驚くべき、画期的な命令、ある意味、決して従い得ない御言でした。

では、「敵」とは、単に外国人のことでしょうか。いいえ。43-48節にかけて、「敵」は色々に表現されています。44節では「自分を迫害する者」ですし、45節では「悪人」及び「正しくない者」ですし、46節では「徴税人（彼らはローマ帝国に雇われて税金を徴収するだけでなく、過剰に取り立てた税の差額を個人的に着服していた盗人でした）」、そして、47節では「異邦人」です。

イエス様の時代の人々はこれらをひっくるめて「敵」と見做しておりました。つまり、神様に選ばれた民、選民であるユダヤ人たちは、同胞以外のそうした人々を、偶像礼拝者ないし不信仰な者として、教会の外にいる教会の敵、と見做していたのです。言い換えれば、天に国籍を持つ神の民と、この世にしか国籍がない人々とを、分けて考えていました。でも、そうでもしなければ、ローマ帝国等の強硬な迫害者たちに対し、心の中において勝利することはできなかつたでしょう。

45 あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。

以前の説教箇所、イエス様は「一切誓ってはならない、復讐してはならない、己の自我を捨て去れ。」と命ぜられました。ここではさらに進んで、「敵」と見做される彼らのために神に祈りなさい」と命ぜられます。その祈りの目的は何と、「迫害者なる彼らが、われらの神、天の父なる神様の子ともになるためである」と仰るのです！

日本人はとかく、「祈る」という行為よりも、「祈り」という言葉がお得意です。信仰のあるなしに関わらず、通常、年賀状などの末尾に「ご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。」と書き添え、ああ、良いことを書いてあげたと、何かほっとして筆をおく習慣がありますね。

いったい、この「お祈り」とは、どのような神様に対する、どれほどの頻度のお祈りでしょうか？ 大方は、「望みます、願います」というのではちょっと軽すぎて、こちらの思いが伝わりにくいので、「お祈りします」という言葉を便利に使っているのでありましょう。

けれども厳密に言えば、「お祈り」とはそんなに簡単・便利に用いてよい言葉ではありません。

「お祈り」には本来、祈った側の責任が伴います。祈りっぱなしはありませんし、ましてや、そう書いただけです、というのはいりません。お相手の「ご健康」と「ご多幸」のために、私が何かして差し上げられることはありませんか、と神様に「執り成し」を申し出ることです。その応答を伺うことです。お祈りとは、神様と自分との双方向のいとも神聖なる営みです。

その上で、「敵を愛する」ことと、更に「自分を迫害する者のために祈る」ということについて、考えてみたいと存じます。

そもそも、あなたの「敵」とは誰のことでしょう？ 生まれて最初の敵は、母や父かもしれません。排泄や食事、入浴、睡眠・・・自分の思い通りに何もかもしたいのに、羨と称して、そうはさせてくれない「敵」です。それから、自分の間合いの中にズカズカと入り込んでくる兄弟、おもちゃや食べ物、親の愛情、親からの評価、すべてが取り合いとなるライバルの兄弟も、仲良しであり、「宿敵」ともなりましょう。

そして、最大の「敵」は他でもない、厳然たる聖であり真実であられる神様かもしれませんし、それに比べ、あまりにいい加減で身勝手な私自身かもしれません。神様が「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正し者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」という、広く、深いご慈愛の御方であられることに、何か面白くないものを感じるのは、神様に腹を立てた旧約の預言者ヨナやヨブばかりではありません。そして、そうした面倒で厄介な自分の感情というものを、もてあましながら、どうにかこうにか塩梅をつけて、人は他者と関わって、生きているのでしょうか。

46-47 **自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるのか。徴税人でも、同じことをしているではないか。**

自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるのか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。

人は、自分をこよなく愛してくれる人、真の愛情を注いでくれる人を察知し、その人の願いを叶えたいと思う本能があると、心理分析の本で読んだことがあります。ですから、自分を愛してくれる人を愛するのは、ごくごく自然の営みです。報いを計算しての心の動きではありません。

ですが主は、そこにあえて、チャレンジして来られます。「**それでは足らぬ、汝の敵をも愛せよ**」と。あえて最も苦手とする「敵」を愛する試みには、「神様からの報い」という、とてつもなく重い分銅の乗った天秤が必要なかもしれません。

この「報い」とは、自分の成長とか、周りからの評価など以上に、神様が天にてみそなわしてくださる素晴らしいギフトが、かの日には、必ずや与えられることでもあります。神様がお約束をたがえられることは、決してありません。

しかし、それでも、この実行は至難です。そこで、私は、「敵を愛する」という言葉の意味を、自分なりに解きほぐしてみました。そして、「敵を愛すること」とは、敵を愛おしいと思う無理無理の感情ではなく、自分の「敵」なる者が、「神様が描かれる私自身の人生脚本に欠くべから

ざるキャストであることを潔く認めること」、換言すれば、その「敵」の存在の必然性、存在価値というものを認めるということで、それが「大切に思うこと」であり「愛すること」に繋がると、解釈し直してみました。そうすると、思い当たる「愛すべき敵」が私にも沢山出て来ます。

では、更なる難問、「自分を迫害する者のために祈る」という祈りも、考えてみたいと思います。何のために祈るのかと申しますと、45節に「あなたがたの天の父の子となるためである」というのがありましたね。

自分に言われなくきつく迫害してくる者に対し、心の中や言葉の上で「仕返しや復讐をせずにいるだけでも精一杯」と思いますが、なんと、その者のために熱心に祈り、その者が救われて、神の子として天に受け入れられることを求めるという崇高な「執り成しの祈り」を、主は私たちに要求されておられるのです。

これはいくら主のご命令でも、「はい、分かりました。」とすぐに実行できるような簡単な事柄ではありません。自分への迫害者が裁かれることや、手ひどい報いを受けることを神様に願わないだけでも、大変な忍耐を要する実状があります。

しかしながら、そのような祈りを、まさに実行して下さったのが、ほかならぬイエス・キリストという神様です。主を直接十字架にかけたユダヤ人やローマ人、主の御言を否み、主を裏切った弟子、そしてその頃存在していなかった2000年後の私たちの罪のためにも、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのかわからないのです。」と、主は、罪責の贖いと執り成しを、それこそ命がけで申し出られ、祈られました。そして「成し遂げられた。」と息を引き取られました。

この御方があられたればこそ、今、私たちはうな垂れず前を向き、御国を目指して、前進できるのです。神様に裁かれる憂いを覚えずに、明るい希望と平安を握り、確かな信頼と和解を心に抱くことができるのです。

「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈る」これは、キリスト者としての一生のテーマ、この世に生かされた者の卒業への課題かもしれません。ですから、「キリストに倣いて」という道を、すべてのキリスト者が、今、夫々懸命に歩んでいるのです。

48 だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

天の御父は無論パーフェクトな御方ですが、「完全：テレイオス」という言葉は100%の完全だけを意味するものではありません。成熟や完全への発達段階とその意味を強く含みます。「あなたがたは、不完全な自分の殻を脱ぎ捨て、完全な御方に限りなく近づいてゆく努力をし続けなさい」と勧めておられるのです。

正しくない者にも、分け隔てなく、惜しみなく、愛や慈悲を分け与えられる神様のお心に近づけば、憎しみの感情の中で疎外してきた人々を、悔恨や和解の道へと招き入れ、正しくない者を神様との正しい関係に導ける可能性があるということ、静かに厳かに信じたいと存じます。

私たちがその昔、教会の外にあって、神と教会の敵であり、迫害者であったとき、神様はすでにその私たちを愛してくださり、独り子イエス様を天より賜って、私たちの霊的御父ともなってくださいました。「神がこのように私たちを愛されたのですから、私たちも互いに愛し合うべきです。」と、新約聖書に書かれてあります。

そして私たちは、このように教会に集われる兄弟姉妹を愛するだけでなく、私たちの敵をも迫害者をも、イエス様が十字架上で贖ってくださった方々として、愛し大切にすべきなのです。彼らが救われて、御国へ到達できるようにと祈り続けるべきなのです。それが神様の深く広い御心である限り、それが、私たちがこの世に遣わされ、この世に生きて神様にお仕えする意味、大切な使命ミッションである限り、私たちは手を携え、教会の主なるイエス様とその道を歩んでゆきたいと願います。

しばしの時、愛と真実のイエス様と心ひとつとなり、黙祷致しましょう。

2026年1月18日

写者あとがき

「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の原著では第11回目の後に、「前半のまとめ」が記されています。まとめは最終回に総括として記載したいと思います。

この機会に、今回から松山幸生先生の講述された月に合わせましたので、季節感が統一され読みやすくなったと存じます。

今回の「神の約束の確かさ」の神

4節でした御自身の宣言に触れて思い出したのが、

ヨハネの手紙1、2章2。「**②4初めから聞いていたことを、心にとどめなさい。初めから聞いていたことが、あなたがたの内にいつもあるならば、あなたがたも御子の内に、また御父の内にいつもいるでしょう。②5これこそ、御子がわたしたちに約束された約束、永遠の命です。**」この**②5節の「約束された約束」**がヘブライ人への手紙6章**⑬⑭⑮**節に繰り返され**⑱**節の「神が偽ることがない、二つの不変の事柄」につながっていると思いました。そして二つの不変の事柄」を松山幸生先生は「究極的な贖罪の御業」と「永遠の命への招き」と明かしてくださいました。

神が約束されたことを更に宣言（宣誓）されなければならない程に私たち人間は不信心なのです。

それを見抜かれた神は私たち人間を罰するのではなく、赦してくださった。神は敵なる人間を愛してくださった。まさに「**私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛して、私たちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。**」その愛の徹底さを学び「**真実なる神の約束**」をどんな時にも信じること。それにはアブラハムの忍耐をも知らなければないと、著者は熱心に訴えていると思いました。

そして、その「**真実なる神の約束に、錨を降ろしなさい。固く繋ぎ留めなさい。**」そのことによって「**神と共に生きる永遠の命**」が与えられ「**真の安息**」が頂けるのだから「その信仰によって、また忍耐によって、約束されたものを受け継ぐ者となりなさい」と教わりました。受け継ぐには次の世代への伝承が必要です。なかなかそれができない自分がいます。しかし、それにもかかわらず、松山幸生先生のお勧めに耳を傾けられる自分を勇気づけたいと思います。先生は言われます「**自分の救いのためではなく、この世界であなたが**

生かされている歴史の救いのために、執り成す者として神の御前に立ちなさい。それが、引いてはあなた自身の救いとなるのです。」

現実には日々暗いニュースで耳が痛み、胸が搔きむしられる思いです。

多くの国民が物価高と将来への不安の中に暮らしています。災害で被災された人々への救援も行き届いていません。そんな不安を利用して民主主義の国における独裁政治が、我が国にも始まっています。独裁へ向かう道を防ぐ力もない程の力が押し寄せています。何もできないが故の苦しみがあります。忍耐が強いられています。

こんな中でも松山先生は言われます。「イエスがお苦しみになられた御受難は、私たちのためだった。そうして今、私がかような苦しみを受けているのも、私がイエスについていく道ゆえなのだ。」と。一つの新しい着想が、この私たちの苦しみの中から生み出されるよう忍耐して行かねばならない時代です。

そのような中に森先生に今の私に必要な説教「敵を愛するために」を賜りました。私たちが目指すビジョンはとてつもなく大きいことをイエス様の「八福の教え」から紐解いてくださいました。魂の深いところから励まされ勇気が出てきます。有難うございます。新しい任地で9ヶ月、ご多忙の中にもご支援を賜り、恐縮な気持ちを持ちながらもお願いを続けています。ご丁寧なご指導を続けてくださっています。かけがえのない牧者に恵まれております。感謝でございます。 2026年1月22日